

フィルカル主催イベント発表資料

オーストリアン・コネクション・イン・アメリカ？ ——小山虎『知られざるコンピューターの思想史』をめぐって

日本学術振興会特別研究員 PD 入江哲朗

◎はじめに

- ▷アメリカ思想史を専門とする私に求められているのは、小山虎『知られざるコンピューターの思想史——アメリカン・アイデアリズムから分析哲学へ』（PLANETS、2022年）のとりわけ第2部「アメリカ編」へのコメントです。以下の「本書」はすべて『知られざるコンピューターの思想史』を指します。
- ▷本書のメインタイトルに「思想史」とあり、また「あとがき」によると、本書は「一般向けメルマガでの連載」をもとにしています（353）。本書は「一般向け」の「思想史」として書かれている、と言えるでしょう。
- ▷「一般向け」の「思想史」を書いた経験は私にもあり（たとえば『英会話タイムトライアル』[NHK出版]で現在連載中の「現代に息づくアメリカ思想の伝統」、だからこそ、本書の歴史叙述に対しては——学術的な場においてならなおさら——批判を投げかける必要があると感じました。ゆえに本発表は、前半で本書の方法を問題とし、後半で本書第2部の内容に論及します。
- ▷本書に対しては、科学哲学者の伊勢田哲治も2022年9月21日のブログ記事で批判を投げかけています。伊勢田の批判には私も大部分同意するので、以下のリンク先にあるブログ記事は本発表で何度か参照します。
▶<http://blog.livedoor.jp/iseda503/archives/2022-09-21.html>

◎この門から入って大丈夫なのか

- ▷学術共同体のメンバー（≒プロフェッショナルの学者）である著者が、自身が従事する学問分野に関して一般読者（general readers）向けに書いた本は、当該分野の入門書として機能する可能性を持つ——著者がそれを意図したか否かにほとんど関わりなく——と私は考えます。このような本をひとまず、「**専門家による入門書**」と呼んでおきます（正確に言うなら「専門家による入門書として受容される本」ですが）。
▶本書の「あとがき」の「思想史研究の実績のない自分には」（353）などから、著者である小山の専門が思想史ではないことがわかります。逆に言えば、それを読みとらないかぎり、思想史の専門家が書いた思想史の入門書として一般読者が本書を受容する可能性は残りつづけます。
- ▷**専門家による入門書が開く門は、著者が従事する学問分野の実践に繋がるものでなくてはならない**——これが、専門家による入門書が遵守すべき倫理だと私は考えます。たとえば、本書を読んで「なるほど、思想史とはこういうことをこういうふうに調べる学問なのか！」と考える読者が現れる可能性は少なからずあり、他方で小山自身は本書が思想史研究の模範と見なされることをおそらく望んでいないでしょう。とはいえ、そのような模範として受容される可能性があることは、専門家による入門書があらかじめ意識しておくべきことのはずです。

◎Wikipediaを典拠として挙げることの問題

- ▷本書に対する伊勢田の批判では、「英語版 Wikipedia を堂々と典拠として挙げること」への反対が表明され

ています。理由としては、「玉石混交」、「記述のバランスがとれてないことも多い」、「いたずらの対象となりやすい」などの諸点が挙げられています。

▷これらに私は、**先行研究の功績が読者に伝わりづらい点**を追加します。先行研究に依拠せずに歴史研究をおこなうことはほとんど不可能なので、先行研究への謝意 (gratitude) を適切に示すことは歴史家に求められる基本的な倫理のひとつです (Schrag 31–33)。しかしたとえば、研究者 A によって明らかにされた逸話が Wikipedia に (適切な註とともに) 載っていたとして、その逸話を引きあいに出しつつ典拠として Wikipedia を挙げていると、A の功績は読者から見えづらくなります。

▶註で挙げられている英語版 Wikipedia を参照すれば誰の功績かわかるでしょうが、そこまでの読者は少ないでしょう。また本書の註は英語版 Wikipedia を挙げる際に記事のヴァージョン (最終更新日時) を示していないので、本書の出版以後に記事の内容が更新されると読者は註の参照元に辿り着けなくなります。

▷伊勢田も言うように英語版 Wikipedia は「玉石混淆」で、なかには秀逸な記事もあります。また私は、「小山さんは二次資料に依拠するとしても、依拠すべき二次資料の選択については信用できる人なのだと思う」という伊勢田の評言に同意します。しかしこれは言い換えれば、たとえば英語版 Wikipedia という三次資料に対して本書は、「玉」と「石」を見わけるスキルを暗黙のうちに駆使しているということではないでしょうか。

▷Wikipedia における「玉」と「石」を見わけるスキルは、研究者としてのキャリアを積んでゆけばおのずとある程度身につくものだと思いますが、少なくとも私はそのスキルをうまく言語化できないので、そのスキルをまだ身につけていない学生に対しては「Wikipedia を典拠として挙げることは推奨しない」という原則を伝えるでしょう。伊勢田も、「学生にレポート課題を出させるときにも Wikipedia 情報には注意するように毎回注意喚起している」と述べています。

▷かりに、小山の考えがこれとは異なり、学生がレポート課題で Wikipedia を典拠として挙げることを問題視していないのだとすれば、研究者ないし教育者としての小山の実践と本書における実践が連続していることとなります。しかしかりに、学生に対しては推奨していないにもかかわらず本書では (暗黙のスキルによって選別された) Wikipedia 記事を典拠に挙げているのだとすれば、それは先述の「専門家による入門書が開く門は、著者が従事する学問分野の実践に繋がるものでなくてはならない」という倫理に抵触していると私は考えます。

◎はたして思想史なのか

▷伊勢田が投げかける批判のうち、「本書で描かれる「思想史」はほぼ人間関係の話に終始しており、登場人物たちの思想内容についてはそれこそ辞書的な記述が少しずつ添えられているにすぎない」は重大だと私には思われます。

▷整理のため、科学社会学者のジョゼフ・ベン＝デイヴィッドが 1971 年の著書で掲げたふたつの基準を引きあいに出してみます。

▶対象は**科学活動**か**科学の概念的・理論的構造**か。

社会的条件の影響を、科学者の行動や科学活動だけに限るのか、それとも科学の基本的概念や論理構造にまでおよぶとみるのか。(ベン-デービッド 2)

▶アプローチは**関係論的** (interactional) か**制度論的** (institutional) か。

関係論的アプローチをとる研究者は、たとえば研究所内での仕事の分担、協力関係、文献の引用パタ

ーン、相談相手の選び方といった、科学者の相互関係を問題にする。これに対して制度論的アプローチの場合には、個々の科学者にとって動かしがたいものであるさまざまな変数と、科学そのものとの関係が問題にされる。たとえば国によって異なる科学者の役割規定、研究組織の規模と構造、経済・政治体系、宗教、イデオロギーの諸側面などの変数がそれである。(ベン＝デービッド2)

- ▷「思想史」と銘打つからには「科学の概念的・理論的構造」にまで踏み込まねばならないと私は考えますが、伊勢田も言うように「本書で描かれる「思想史」はほぼ人間関係の話に終始して」います。言い換えれば、本書は（哲学者を含む広義の）科学者の思想よりも科学者の行動（誰がいつどこで誰と会ったとか、何年にどこへ移住したとか）をより重点的に扱っています。
- ▷本書のアプローチに関しては、上の黄色マーカー部分が本書において特に重視されていることから、制度論的と見なしうるでしょう。
- ▷まとめると、本書は事実上「科学活動への制度論的アプローチ」を試みていると言えそうですが、これはベン＝デイヴィッドの科学社会学の目標でもありました（ベン＝デービッド17）。したがって、本書はどちらかと言えば思想史よりも科学社会学に近いと言えるかもしれません。

◎コシュートを「オーストリア的」と形容することの問題

- ▷本書は、コンピューター・サイエンスと分析哲学といういっけん疎遠なふたつの学問分野の発展から、「オーストリア的」なもののアメリカへの移入という共通条件を読みとっています。しかし、「本書で描かれる「思想史」が「ほぼ人間関係の話に終始して」いる（伊勢田）ため、「オーストリア的」なものとして本書が浮かび上がらせようとしているのは、「オーストリア的」な思想よりもむしろ、オーストリアと何らかのかたちで関わる人間関係——言うなればオーストリアン・コネクション——です。
- ▷本書第8章は、アメリカのオハイオ州クリーブランドが19世紀半ば以降、オーストリアからの移民によって「オーストリア化」（173）されていったと論じています。そして、「クリーブランドがどれほど「オーストリア的」かを物語るエピソード」（173）として、コシュート記念像の建設をめぐる20世紀初めの騒動を挙げています。
- ▷コシュート・ラヨシュ（1802–94）は、ハンガリー1848年革命の中心人物です。この革命は、ハンガリーのオーストリア帝国からの独立を目指していましたが失敗に終わりました。本書によると、1901年にクリーブランド在住のハンガリー人団体が、コシュートの生誕100年を記念する像をクリーブランドの中心地に建設しようとしたのだそうです（173–74）。
- ▷これははたして、「クリーブランドがどれほど「オーストリア的」かを物語るエピソード」なのでしょうか。オーストリアからの独立を求めた英雄の顕彰は「オーストリア的」な出来事なのでしょうか。帝国の支配に抗した人物にまつわる出来事に、帝国名の形容詞を冠することは、ほとんど文字どおりの意味において帝国主義的なふるまいではないでしょうか。

◎ハンガリー1848年革命とハーヴァード

- ▷ブルース・ククリック『アメリカ哲学の興隆』（1977）は、19世紀後半から20世紀初めまでのハーヴァード大学哲学科を「黄金期」と形容しています（Kuklick, pts. 2–3）。じじつ当時のハーヴァード大学哲学科には、プラグマティストのウィリアム・ジェイムズ（1842–1910）、観念論者のジョサイア・ロイス（1855–1916）、心理学者のヒューゴー・ミュンスターバーグ（1863–1916）といった名だたる面々が在籍していました。
- ▷「黄金期」以前のハーヴァードでの哲学教育は、ほとんどフランシス・ボーエン（1811–90）ただひとりに

よって担われていました（Kuklick, ch. 2）。このボーエンの人事にハンガリー1848年革命が少し関わっています。

- ▷ 19世紀半ばにおいて、ハーヴァードの運営はコーポレーション（the Corporation）と監督会（the Board of Overseers）というふたつの機関によって管理されており、両機関のあいだに確執がありました。ボーエンは1850年にコーポレーションから「古代史および近代史のマクリン・プロフェッサー」への指名を受けたのですが、監督会はこの指名に対する拒否を翌年議決しました。ボーエンは、彼が編集する『ノース・アメリカン・レビュー』で何度か保守的な政治的見解を表明しており、それを監督会が問題視したからです。とりわけ批判されたのが、ハンガリー1848年革命の意義を否定するかのようなボーエンの姿勢でした（入江94-101; Morison 290-93）。
- ▷ たとえば、自由土地党に属するロバート・カーター（1819-79）がボーエンの教授就任に反対するキャンペーンを展開しており、ここでは、「歴史学教授が[...] アメリカ的信条（American principles）の染み込んだ者であることを要求する権利」が公衆にはあるといった理由が持ち出されました（qtd. in Morison 292）。ここからは、オーストリア帝国に対するコシュートらの革命と、かつての英帝国に対するアメリカ人たちの革命との重ねあわせを読みとれます。
- ▷ ボーエンは結局、1853年に「自然宗教、道徳哲学、および市民政（Civil Polity）のアルフォード・プロフェッサー」に就任しました（Morison 293; 入江97, 100）。

◎モダニズムから分析哲学へ

- ▷ 「オーストリア的」なものと分析哲学史との関わりと言われて、少なからぬ者がまっさきに思い浮かべるキーワードが「世紀末ウィーン」でしょう。本書178頁にも言及がありますが、そこからほとんど掘り下げられない点がいささか不思議です。
- ▷ たとえば、アラン・ジャンク+スティーヴン・トゥールミン『ウィトゲンシュタインのウィーン』（1973）はこう主張しています。

われわれは後期ハプスブルク朝ウィーンの社会的・文化的絵模様を再構成し、その環境に生きる人々にとって——単に職業的な哲学者にだけでなく、すべての教養も思慮もある人々にとって——カント以後も「批判、が持続していたことの重要性」を指摘した。このような研究の結果、われわれは次の二つのことを見てとった。(一) 一般的で哲学的な「言語批判」の必要性は、ウィトゲンシュタインが『論考』を書くおよそ十五年前、ウィーンにおいて既に認められていた。(二) そのような包括的な言語批判を最初に試みたのは(フリッツ・)マウトナーであったが、それには欠点があったため、一つの全く特殊な困難が、未解決のままであった。けれども、ヘルツやボルツマンの物理学とキルケゴールやトルストイの倫理を、一つの一貫した説明の中で両立させるような方法を見つけることができるなら、この困難は克服されるかもしれないのだ。われわれの分析によって導かれた仮説は、端的に、これが、ウィトゲンシュタインがもともとかがわっていた問題であり、『論考』を書く目標を決定した問題である、というものである。(トゥールミン+ジャンク 276-77)

- ▶ 『ウィトゲンシュタインのウィーン』が現在のウィトゲンシュタイン研究者たちのあいだでどう評価されているのかわかりませんが、同書が描き出す（強いて言えば）「ウィーンの」なものは、小山の言う「オーストリア的」なものよりも説得力があるように私には感じられます。
- ▷ 『ウィトゲンシュタインのウィーン』が再構成した「後期ハプスブルク朝ウィーンの社会的・文化的絵模様」には、20世紀初めの「モダニズム」も含まれます（トゥールミン+ジャンク 20）。他方で、『フィルカル』

第1巻第1号(2016年3月)に掲載された長田怜の論文では、「分析哲学のルーツにはモダニズム(modernism)がある」というテーゼが提起されています(43)。

▷美術におけるモダニズムの理論化にもっとも寄与した者のひとりが、ユダヤ系アメリカ人の美術批評家のクレメント・グリーンバーグ(1909–94)であり、彼によれば「最初の真のモダニスト」はカントです(グリーンバーグ 62; see also Genter 32–38)。加えて注意すべきは、本書第9章で取り上げられている**1930年代ニューヨークという知的環境**に、デビュー当時のグリーンバーグも属していたことです。彼の初期批評のなかでもっとも有名な「アヴァンギャルドとキッチュ」は、『パーティザン・レビュー』1939年秋号に掲載されており、同誌は1930年代のニューヨーク知識人たち(New York Intellectuals)が活躍した主たる媒体のひとつでした(秋元 190–96)。

▶グリーンバーグもそうであるように、ニューヨーク知識人たちの多くがユダヤ系でした。また世紀転換期ウィーンの「モダニズム」に関しても、ユダヤ人たちの寄与が大きかったと言われていています(Beller 94–95)。私がさきほど用いた「ウィーンの」という言葉の意味が「ユダヤ的」とどれほど重なるかは重要な論点になりそうです。

◎「ニューヨークのジュニア・ウィーン学団」

▷20世紀半ばにハーヴァードを「分析哲学の中心地とすることに貢献」したと本書198頁で評されているモートン・ホワイト(1917–2016)も、実は1939年以降の一時期『パーティザン・レビュー』に寄稿していました(White 33, 46–47)。

▶同じく本書198頁に「ホワイトはユダヤ人ではない」とありますがこれは誤りで、ホワイトの両親はともにユダヤ系アメリカ人です(White 1–2)。

▷自伝によるとホワイトは、1930年代後半にニューヨークで友人たちと、「論理学と哲学と政治経済をまとめて学ぶクラブ」を結成したのだそうです(White 35)。このクラブについて語るホワイトの以下の言葉からも、1930年代ニューヨークが彼にとってどれほど刺激的な環境だったかが窺われます。

我々は自分たちを、ニューヨークのジュニア・ウィーン学団のようなものと見なしており、我々を興奮させた諸観念すべてについて共同で研究していた。論理学を政治と結びつけることに対する我々の関心はときに、『資本論』の一部を「公理化」しようとする無駄な努力に帰結しさえした。(White 35)

▷1930年代ニューヨークでは、本書第9章で論じられているように科学哲学が興隆していたばかりでなく、モダニズムの理論化も進められていた——それを可能とするような、世紀転換期ウィーンをも髣髴とさせる領域横断的な知的活発さが1930年代ニューヨークにあったことを、ホワイトの自伝が証言しています。以上の諸点をさらに研究してゆけば、**世紀転換期ウィーンにおける「言語批判」から20世紀半ばのアメリカの分析哲学までを結ぶ、「モダニズム」をキーワードとするいまひとつの(知られざる?)思想史**が浮かび上がってくるのかもしれませんが。

◎文献表と謝辞

Beller, Steven. “How Modern Was Viennese Modernism? The Historical Context of Otto Weininger’s Critique of Modernity.” *German Politics and Society*, vol. 14, no. 4, winter 1996, pp. 83–98.

Genter, Robert. *Late Modernism: Art, Culture, and Politics in Cold War America*. U of Pennsylvania P, 2010.

Kuklick, Bruce. *The Rise of American Philosophy: Cambridge, Massachusetts, 1860–1930*. Yale UP, 1977.

Morison, Samuel Eliot. *Three Centuries of Harvard, 1636–1936*. 1936. Belknap Press, 1964.

Schrag, Zachary M. *The Princeton Guide to Historical Research*. Princeton UP, 2021.

White, Morton. *A Philosopher's Story*. Pennsylvania State UP, 1999.

秋元秀紀『ニューヨーク知識人の源流——1930年代の政治と文学』、彩流社、2001年。

伊勢田哲治「知られざるコンピューターの思想史」、『Daily Life』、2022年9月21日、<http://blog.livedoor.jp/iseda503/archives/2022-09-21.html>。

入江哲朗『火星の旅人——パーシヴァル・ローエルと世紀転換期アメリカ思想史』、青土社、2020年。

長田怜「分析哲学とモダニズム」、『フィルカル』第1巻第1号、ミュー、2016年3月、42–67頁。

グリーンバーグ、クレメント「モダニズムの絵画」川田都樹子＋藤枝晃雄訳、藤枝晃雄編訳『グリーンバーグ批評選集』所収、勁草書房、2005年、62–76頁。

小山虎『知られざるコンピューターの思想史——アメリカン・アイデアリズムから分析哲学へ』、PLANETS、2022年。

トゥールミン、スティーヴン＋アラン・ジャニク『ワイトゲンシュタインのウィーン』藤村龍雄訳、平凡社ライブラリー、2001年。

ベン-デービッド、ヨセフ『科学の社会学』潮木守一＋天野郁夫訳、至誠堂、1974年。

*本発表は、科学研究費補助金（特別研究員奨励費、課題番号：21J00431）による研究成果の一部です。本発表資料の草稿に対して中井杏奈氏が有益なコメントを寄せてくださり、Bellerの論文についても中井氏よりご教示いただきました。記して感謝いたします。